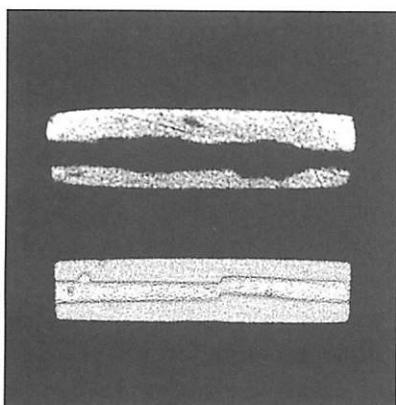


これらは階層差を反映している可能性があることが判明した。また、その規模・構造は集落の倉と類似しており、穀稻収納を基本とし、収納稻が家長の強い管理下にあったこと、を推測できた。

■光学的解析法による古代ガラスの加工法等に関する研究

代表者 肥塚隆保 新規
古代のガラスは各種類の材質のものが知られている。弥生時代や古墳時代の遺跡から出土するガラスは、製品や一次製品（ガラス塊や板状のガラス）として輸入され、日本国内において加工された。弥生時代を代表するガラスとしては鉛パリウムとカリガラスがあり、前者はいわゆる加熱による「溶融法」により成形されていたのに対して、カリガラスの管玉は加熱によらない「乾式法」により成形されているものが多数発見された。写真（上）は鉛パリウムガラスの管玉であり、何らかの芯に粘土などを剥離材料として使用し、これにガラスを巻き付けた痕跡が残っており、管引きされたものではない。いっぽう、カリガラス写真（下）は石製の管玉に見られるように穿孔された痕跡が残存しており、両者における加工方法は明らかにことなっている。これら、乾式法によるカリガラス管玉は北部畿内から山陰、北陸地域に分布し、九州地域には見られない特徴を有するものである。今後、加工方法に関する詳細な研究はガラス製品の流通を研究する上でも重要となる。



高エネルギーX線CTによる3次元画像

▲奨励研究（A）

ムラの場、ハカの場 GISを利用した古墳時代集落・古墳の立地選択の研究

代表者 金田明大 新規

古墳時代集落、および古墳の立地選択において、その嗜好性がどのようにあらわれているかを検討することを目的としている。遺跡の立地条件を検討する上では地理情報システム（GIS）を利用するところが有効であると考えられ、利用のための技術的、方法的な検討を兼ねて、研究を進めている。

本年度は岡山県上房郡北房町域の盆地内を検討地域に選定し、古墳を中心とした踏査、および分布調査をのべ3回おこなった。また、3基からなる才田古墳群について、周辺測量をおこなった。加えて周辺観察から方墳と考えられる才田1号墳については横穴式石室の実測もおこなっている。

データベース

▼二条大路木簡データベース

代表者 町田章 繼続

長屋王家木簡データベース作成グループは、長屋王家木簡に引き続き二条大路木簡についても、94年度以来研究成果公開促進費（データベース）の支給を受け、文字情報と画像情報をリンクさせたデータベースを作成すべく、入力作業を継続している。97年度は14,550点の入力作業を行った。二条大路木簡は約74,000点にのぼるが、そのうち58,000点余の入力が終わり、98年度で入力作業は完了する予定であり、また同年度中に积文既公開の木簡については、このデータベースを公開すべく準備中である。



旧倉吉町ポンプ室（倉吉市）

調査研究彙報

◆名勝旧大乗院庭園の整備

（財）日本ナショナルトラストが国庫補助を受けて実施する名勝旧大乗院庭園の整備は七ヶ年計画の五年目になる。今年度の整備に関係する重要な発掘調査の成果としては、庭園東北部の地形が近代の造成によって大きく改変され、池の汀線が大きく北方へ後退することが判明したことと、北中島にかかる中世の橋脚・橋台部が確認できなかったことである。（年報1998-II p.参照）

先の調査成果を受けて、大量の近代盛土の範囲を推定するために次年度に発掘調査の負担を軽くするためにもボーリング調査を実施し、江戸時代末期の汀線の推定を行うこととした。整備事業は、仮設搬入路部分を除いて東岸の洲浜を20m分程整備した。整備手法は、池南岸と同様である。

（加藤允彦）

◆鳥取県の近代化遺産調査

2ヶ年計画の第2年次。本年度は、鳥取市および倉吉市を中心とする2度の詳細調査と補足調査を実施した。このうち、倉吉市郊外にある小川酒造は、外壁にコリント式オーダーの柱を配した応接間をもつ主屋と、数棟の酒蔵を広大な敷地に建てならべたうえ、背面を流れる鉢屋川の清流を引き入れた別邸「環翠園」をつくる。鉢屋川は数百m下流にある旧倉吉町水源地ポンプ室（左図）まで続き、昭和初期に帰国家族が住みついで「倉吉のアメリカ村」と呼ばれた余戸谷町の町並みともあいまって、この付近は倉吉の近代を重層的に映し出している。これらの調査結果は、報告書として刊行した。

（箱崎和久）